

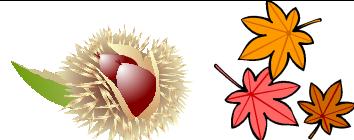
青翔中だより



教育目標
～自立～
～貢献～
～創造～

8月号 No. 6 2019年8月30日 苫小牧市立青翔中学校

実りの秋に向かって!



苫小牧市立青翔中学校長 杉本昌史

吹く風の涼しさに北国の短い夏も終わりを感じるこのごろです。今年の夏休みは、「猛暑日・真夏日」や「熱中症に注意ください」といった、北海道であまりなじみのないことが、新聞やテレビで毎日のように報道されていたように思います。しかし、校舎内には再び、25日間の夏休みを終え、子どもたちの元気な声が響いています。

私は第2学期の始業式で、子どもたちへ「2学期は、中学校生活を充実させる学期です。自分の得意とするところを大いに發揮してください。目標をしっかりと定め、一日一日を大切にし、思いやりの心を持ち、当たり前のことを当たり前にできる生徒、学校になってほしい。」と話をいたしました。

その中にあって、特に「学校祭」は、一人ひとりに出番があって、一人ひとりがかけがえのない存在であり、学級・学年の力が試され、問われると思います。1年生は初めての学校祭です。今の1年生には潜在的に大きな力が感じられます。2年生は昨年の学校祭での反省を生かし、大きく飛躍が期待できます。3年生は1、2年生のお手本として最上級生にふさわしい実力を発揮するでしょう。

9月12日(木)・13日(金)、第11回学校祭は、多数の方々にご来校の上、青翔中学校の生徒の取組・姿を実感していただきますよう、お願い申し上げます。

あわせて、2学期は、学習に力を入れた生活を送らせたいとも思います。一時間の授業を真剣勝負で取り組む姿勢、家庭での学習の大切さ（とまこまい学びの3か条）など、当たり前に実行されることを期待します。

そのためには、健康であることの大切さを理解し、健康であることに感謝することです。丈夫な身体と豊かな心を持つ、自分自身の命を大切にして、大いに力を発揮してほしいものです。難しいことは言いません。基礎・基本をしっかり学ぶという当たり前のことを当たり前にを行い、疲れを感じたら心や身体を休めるという間を取る、そうすることで次のやる気や意欲が生まれます。

一年の時の流れは着実に進んでいます。特に3年生にとっては、進路実現に向け、中学校生活のカウントダウンがはじまります。一日一日を大切に学校生活を過ごしてもらいたいものです。1、2年生は、生徒会活動など、後期から3年生に取って代わって学校の中心となって活動してほしいものです。

終わりになりますが、今学期も、保護者・校下地域の皆様には、生徒が明るく学校生活を送れるよう、本校の教育活動にご理解とご協力を願いいたします。

全道大会結果～青翔中生の活躍～

○女子卓球部

団体 第3位 → 全国大会出場（滋賀県）
※予選リーグ敗退

○男子バレー部

予選ブロック戦 敗退

○剣道部

第3位

○陸上部

男子 4×100m リレー予選敗退
男子個人 100m 予選、準決勝敗退

○バドミントン部

2回戦敗退

○柔道部

個人 81kg 級 2回戦敗退

○器械体操部

男子一部 個人総合32位
女子二部 個人総合24位

<全道大会以外の青翔中生の活躍>

○吹奏楽部 日胆地区吹奏楽コンクール 銀賞

○合唱部 NHK学校音楽コンクール 銅賞

町内会夏祭り～青翔中の生徒数多く活躍～

7月6日（土）には拓勇西町内会夏祭、7月28日（日）には拓勇東町内会夏祭及び新開・明野元町町内会夏祭が開催されました。毎年、各町内会長様のご厚意により、本校生徒の活躍の場を提供いただいております。地域の皆様に支えていただきながら、多くの生徒がボランティアとして祭運営に携わっています。今年も「（生徒たちは）よくがんばってくれている。」とお褒めの言葉をいただきました。働くことの大切さや大変さを感じたり、地域の方々とのつながりを大切にしたりすることで、家庭と地域及び学校が協力して子どもたちを見守り、育していくコミュニティづくりの一つとなっています。



平和を考える～生徒会書記長 柴田くんの報告～

夏休み中に行われました「苫小牧市中学生広島派遣事業」に、本校から柴田君が参加しました。始業式後に全校生徒に向け、今回の派遣についての報告会を行いました。世界唯一の原爆被爆国として、平和について真剣に考え、原爆や戦争の悲惨さを後世に伝えていかなければならない責任を改めて感じた報告会でした。

苫小牧市非核平和条例に基づいた活動の苫中学生広島派遣事業の派遣者の一員として、広島を訪問しました。

広島は、第二次世界大戦中の一九四五年八月六日に原爆が投下された場所で、その原爆によつて、五十六万人が被爆し、十六万六千人が犠牲になりました。広島では初めに平和祈念資料館というところを見学しました。

資料館では、一九四五五年八月六日の広島の街が原爆によつて破壊される様子を再現するホワイットパノラマを見ました。

朝の平和な広島に上空の飛行機から投下される原爆。その原爆が広島に暮らしていた人々の頭上で突然爆発し、台風よりも桁違いに激しい爆風と、人体を一瞬で黒焦げにしてしまう熱線によつて一瞬にして広島の街は破壊されてしまいました。あの八月六日の朝、平和だった広島の面影はもうどこにも見られません。ただがれきの山だけがそこに広がっていました。原爆の恐ろしい威力を見て、とても恐ろしく感じました。

その後、原爆を体験した語り部の豊永さんのお話を聞きました。豊永さんは当時九歳。

広島でお母さんと幼い弟との三人暮らしをしていましたが、原爆が投下された八月六日の朝、豊永さん自身は通院のため爆心地から十キロメートル離れた隣町にいて、直接熱線や爆風の被害を受けることはありませんでした。爆心地の近くにいるはずのお母さんと幼い弟が心配で、駅で広島行きの電車を待つていると、広島からの電車がやつて来ました。そこに乗っていた人は、髪は焼け焦げてちりちりで、顔はやけどで元の大きさの二倍にまで膨れ上がり、電車から出でてくる人が恐ろしくて怖くてたまらなかつたそうです。

爆心地の近くに居た豊永さんのお母さんと弟は危ないと思つた瞬間に伏せた弟の上に被さりました。弟はけが一つありませんでしたが、お母さんは腕の一部と顔の全体に熱線を受け、ひどいやけどを負い、豊永さんが再会したときは顔がぱんぱんに腫れ上がつていたと聞きました。

私たちがこの恐ろしい戦争という出来事を体験することなく平和に生きてきました。そのため、悲惨な戦争という出来事に対して曖昧な認識しか持つことはできない人が多く居ると思います。当時わずか9才だった豊永さんが体験したこのような恐ろしい出来事はもう二度と起こしてはならないと思います。

このような悲惨な出来事をもう絶対に起こさないために私たちはこれから何ができるのでしょうか。この機会にぜひ、考えてみてください。

また、今回紹介しきれなかった被爆者の岩田さんのお話を後日生徒会便りでお伝えしますのでそちらもぜひご覧ください。

